



みのる法律事務所  
弁護士 千田 實  
〒021-0853  
岩手県一関市字相去57番地5  
TEL : 0191-23-8960  
FAX : 0191-23-8950

みのる法律事務所便り  
第373号  
令和3年5月

い な べ ん だ べ ん く  
田舎弁護士の駄弁句

93



定年は <sup>びんぼうにん</sup>貧乏人と <sup>びんぼうにん</sup>病人を  
<sup>ふ</sup>増やすと言われ <sup>うむと肯く</sup>うむと肯く

令和3年4月23日  
おおぞらうきよのすて  
青空浮世乃捨

前号で紹介した畏友松村論先生の『老後の健康と経済不安』は名著です。そのことは前号でも書きましたが、もう少し補充します。

その本の中には、「日本の定年退職制度は、病人と貧乏人、つまり不幸な人を増やすだけですから早く廃止するべきです」とあります。そう言われればそうかも知れないと、思わず「うむ」と肯いていました。

前号で紹介した「定年後 犬も嫌がる 5度目の散歩」の川柳は、多くの人に笑ってもらいました。松村先生は「定年後、夫は妻の運転手」という川柳も紹介しています。松村先生はこれらの川柳を紹介した後に、「することがないほどつらいことはないのですね。することがないからパチンコばかりしている老人も多いようです」、「定年後の最大の日課は、病院通い。その他は、散歩、パチンコ、カラオケ、それに酒を飲むだけ。これでは貧乏人と病人が増えます」と続けています。

松村先生は、令和3年1月25日で満71歳となりました。株式会社マツムラ健康館の代表取締役として、ヨーガ体操の指導、全国で年50回以上の健康講演活動を始め、多くの分野で大活躍です。その体の柔軟性には目を見張ります。卓球で国体へ何度も出場した実績もあります。

「週休二日制を知らないままあの世にいく男」と名乗っているようですが、人生には定年も休日もないのです。生きている限り、一瞬も休まず楽しみ続けるだけです。松村先生のお言葉と生き方に共感します。

いなべん だべんく  
田舎弁護士の駈弁句

94

コツコツと ただコツコツと 重ねきた

ぐちよく 愚直な影 わが師と慕う



令和3年4月23日

青空浮世乃捨

「かたぎ」には「堅気」という字と、「気質」という字があります。「堅気」は、「まじめでしっかりした性質。まじめな仕事や生活」という意味です。「気質」は、「同じ身分・職業・年代の人に共通してみられる型にはまった性格」という意味です。

どちらも好きな言葉です。どちらもコツコツと努力する姿が浮かんでくるのです。更に好きなのは「愚直」という言葉です。「正直すぎて気が利かないこと。ばか正直」という意味ですが、大好きです。鑑定人佐々木信一先生に、愚直な生き方の影を憧れの目で見て来ました。

先生の堅気な生き方と、職人氣質しよくにかたぎ ひに惹かれ、先生のように自分の技術みがに磨きをかけて自信を持ち、満足できる仕事をやり遂げようとする実直まことで頑固な職人氣質の弁護士となりたくて、先生のように愚直な生き方をしたいと、先生を師と慕って、その影を追い掛けてきました。

満95歳となった佐々木先生から、先生の鑑定記録集まがの保管を任せられました。身に余る光栄です。嬉しくて仕方ありません。佐々木先生からは「自分は先生と似たところがある」というお手紙をもらい、さらに舞い上がってしまいました。

「いなべんの短編集」の第3話として、『ある鑑定記録集』と題して、佐々木信一先生のことを書きました。みのる法律事務所事務局手製の冊子ですが同封しますのでご一読下さい。

## 人生100年時代と定年制



いなべんの駄弁句<sup>さとの</sup>で紹介しましたが、松村 諭 先生の「定年は、病人と貧乏人を増やす」という御説には「そうかも知れない」と<sup>うなず</sup>背いてしまいました。

「人生は生きている限り現役なのに、なぜ仕事には定年があるのだろうか」、「誰かいつ定年という制度を考えたのだろうか」、「定年は誰のための制度なのだろうか」、「定年という制度のプラス面とマイナス面はどこにあるのだろうか」などという思いが湧いて来ました。

結論を先に言えば、「人間は生きている限り人生の現役である。定年という制度は、その方が都合が良いと考えた人の勝手な思いでできたものだ。定年になったからと言って、生きている以上は人生を止めることはできない。定年に振り回されてはならない」と言うことになりそうです。

私は松村先生と同じで、定年制も週休二日制も選択肢にはありません。「生きている限り定年はなく、年中無休でやりたい仕事をやり続ける」という生き方を選びます。

そもそも「仕事」とは、「頭とからだを動かしてはたらくこと」です。人間は生きている限り、頭と体を動かしてはたらかなければならぬものです。そうしなければ、生きられないし、生きていることを楽しみ尽くせないのです。草食動物は一日の大半を、草を食べているのと同じです。一日だって休むことはできないのです。それを止めたら死んでしまうのです。

「定年」とは「会社などで、雇用関係が終了する年齢」です。「長い間、我が社のためにご尽力賜りありがとうございました。ですがもう辞めてもらいます。お疲れ様でした」と雇う方の都合で創り出した制度です。

そんな定年制などという制度に乗せられて自分の人生まで止めてはいられません。定年を機に自由をのんびり楽しもうという人もいないわけではありません。そのような人にとって、定年制は嬉しい制度となるのでしょうか。人それぞれですから、それはそれでよいと思います。

定年制が日本で導入されたのは、明治（1868～1912）時代のようにです。明治・大正（1912～1926）時代の男性の平均寿命は43歳前後で、長期間労働がなかったようです。

民間企業では、明治35（1902）年に日本郵船が55歳定年制をとったとのことですが、当時の男性の平均寿命が、43歳位ですから、55歳の定年は、平均寿命より10年以上も遅いのです。定年が平均寿命を遥かに超えていますので「定年 = 死」という時代だったのです。定年後はそう長くは生きていなかったのです。

令和の今日、男性の平均寿命だって80歳を超えています。平均寿命はどんどん伸びていて、「人生100年時代」が来るとさえ言われています。

日本では、平成10（1998）年に60歳定年となり、平成18（2006）年に65歳定年となりました。それでも定年の方が平均寿命より20年以上早いのです。定年退職後20年以上は生きていられるのです。近い将来は30年となりそうです。年金だけでは生活はできません。2,000万円以上足りなくなるとの試算も出ています。これでは定年後に、貧乏人は増えてしまいます。平均寿命は長いのですが、健康寿命は割と短いのです。高齢者は病人と認知症が増えそうです。

松村先生は、前著で「60歳から90歳までが人生の黄金期」と書いていますが、その通りだと思います。

私は、世間のこと、他人のこと、そして自分のことが少し分かるようになったのは60歳を過ぎた頃からです。60歳を過ぎてやっと人の役に立つ仕事がいくらかできるようになりました。本も書けるようになりました。大病も経験しましたが、世のため、人のために役立つような気がして来たのは、70歳を超えてからです。80歳近くになり、今が一番仕事が出来てくる気がします。

人生100年時代の定年は「その職場を辞めた」と言うだけです。「仕事を辞めた」と考えるのは早計です。その先こそ本番です。定年までの経験を活かして、世のため、人のために役立つのは定年退職後が本番なのです。松村先生の「定年は、病人と貧乏人を増やす」という説には共感します。

人生100年時代のいま、定年制は見直すべきです。ついでに生き方を見直してみましよう。

